

平成 21 年 5 月 12 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720182
 研究課題名 (和文) 大阪相撲についての都市社会史的研究
 —都市大阪の総合的把握の一階梯として—
 研究課題名 (英文) Social History of Osaka Sumo : a stage of total Understanding of Osaka
 研究代表者
 飯田 直樹 (IIDA NAOKI)
 財団法人大阪市文化財協会・大阪歴史博物館・学芸員
 研究者番号：10332404

研究成果の概要：本研究は、現代人にとってもっぱら相撲興行というスポーツ娯楽を提供する存在としてしか認識されていない相撲集団が、歴史的には様々な社会的役割を果たしていたことを、大阪相撲という相撲渡世集団に即して明らかにした研究である。天満青物市場など市場社会や蔵屋敷 (各藩が大坂に年貢米などを販売するために設けた施設)、さらにはそこで荷役労働に従事した仲仕と呼ばれる肉体労働者、賤民身分 (穢多・非人) などと大阪相撲との関係を具体的に明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	360,000	3,760,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：相撲、都市、大阪、社会史、角力

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、本研究を開始するまで、大阪相撲と都市社会大阪を構成する様々な集団や階層などとの関係を解明することを通じて、大阪相撲の集団としての特質や集団の内部構造を明らかにするとともに、大阪という都市社会の社会構造の一端を明らかにすることを目的にして研究を進めてきた。大阪相撲とは、江戸時代以来、江戸相撲や京都相撲などととも、三都を巡回する大相撲興行

を担った、大阪を拠点とする相撲渡世集団である。大阪相撲は、大阪の都市社会を構成する多様な集団や階層—市場社会、蔵屋敷、仲仕などの「日用」層、博徒・侠客、若者組、寺院社会など—と様々な関係を取り結んでいた。

大阪相撲が都市社会内で形成した、こうした社会関係の総体を解明することが、ひいては大阪相撲の集団としての特質や内部構造を解明することにつながると考えた。また、

都市社会大阪からみれば、上記の作業は、都市社会を構成する市場社会や蔵屋敷、都市下層社会などの諸要素の実態やその特質の一端を相撲史研究の側から解明することを意味するものと考え、本研究を計画した。

2. 研究の目的

本研究の最大の特色は、都市社会史の一環として大阪相撲を研究する点にある。従来の相撲史研究の枠におさまらない、大阪相撲の多様な側面に注目するとともに、その総体を把握し、大阪相撲を大阪という都市社会やその歴史過程に位置づけるということである。このような作業は、直接的には大阪相撲という集団の内部構造やその特質を解明することを目標としているが、検討する論点は、市場社会論、蔵屋敷論、都市下層社会論などといった、都市社会史の様々なテーマにつらなるものである。したがって、本研究は、相撲史研究の進展に大きな貢献をするばかりでなく、大阪相撲が関係した、都市社会を構成する多様な要素の実態解明にもつながり、ひいては、都市大阪の社会構造の解明にも貢献するものと予想される。

本研究は、大阪相撲と(1)市場社会、(2)仲仕などの「日用」層、(3)蔵屋敷、(4)博徒・侠客などとの関係について、具体的に明らかにすることを目的として計画された。

(1)市場社会については、①市場社会で働く仲仕などの労働者と大阪相撲、特に力士層との関係や②市場内で紛争がおきた場合、大阪相撲はその紛争にどう関わるのか(仲裁者となるのか)といった諸点を明らかにする。

(2)「日用」層については、①「日用」層は「部屋」を単位に労働・生活の両面で統轄される存在であったが、その「日用」層の「部屋」と相撲部屋との類似点・相違点、②「日用」層と大阪相撲の力士や頭取層との様々なレベルでの交流の実態、といった諸点を明らかにする。

(3)蔵屋敷については、①蔵屋敷で働く蔵仲仕などと大阪相撲との関係、②蔵屋敷を経営する各藩と大阪相撲との関係(お抱え力士の「抱え」の具体的内容など)といった諸点を明らかにする。

(4)博徒・侠客については、①博徒・侠客が相撲興行にどう関わるのか、②明治期には大阪相撲内で紛争が何度も起こり、その度ごとに侠客が仲裁に入っているが、その仲裁の実態について、といった諸点を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)大阪相撲と①市場社会、②仲仕などの「日用」層、③蔵屋敷、④博徒・侠客との関係を解明するために、関連資料を収集し、調査する。大阪相撲の関連資料としては、小野川部屋関係文書(個人蔵)、藤島部屋関係史

料(大阪歴史博物館蔵)、大阪相撲番付(大阪府立中之島図書館・大阪歴史博物館蔵)などがある。相撲の史跡研究会編『相撲の史跡』5などで紹介されている力士墓や相撲碑なども重要な資料である。

(2)上記①～④が複数存在する地域や諸要素が近接している地域を優先的に選択し、検討していく。具体的には、青物市場(市場社会)・大阪天満宮(寺院社会)を抱える天満地域や和光寺(寺院社会)を抱え、新町遊廓や鞆の干鯛市場、雑喉場の魚市場などに近接する堀江地域などである。

(3)関係資料の残存状況やその特質についても考慮すべきである。相撲史関係の資料は、まとまった資料群として残存しているものがあまり多くないのがその特質である。したがって、相撲史特有の資料群ではない新聞資料などよりも、小野川部屋関係文書や大阪干鯛仲間文書など、比較的まとまりがあり、かつ大阪相撲の関係資料を豊富に抱えている資料群を優先的に調査する。

(4)また、大阪相撲内で紛争がおきた時期・時代(例えば寛政期や明治前期など)に、比較的多くの資料が作成され、現在まで資料が残されている場合が多い。したがって、紛争時期を優先的に検討対象とする。

(5)関係資料の所蔵情報を収集するために、アマチュア相撲史家などとも情報交換を行い、関係資料の所蔵先を把握することにつとめる。

4. 研究成果

(1)市場社会について。大阪相撲の藤島部屋は鞆の干鯛市場に部屋を設け、天満青物市場は、本場所に幟を贈る習慣があった。両市場内で紛争が起きた場合、猪名川や押尾川といった頭取層=力士の親方層が仲裁に入っていた。雑喉場魚市場との関係については、相撲興行場所に雑喉場市場関係者専用の入場口があることが判明した。

(2)「日用」層について。猪名川や藤島などの鞆部屋と一括される相撲部屋は、市場内で部屋を経営するとともに、そこで働く仲仕たちを弟子として受け入れていた。大阪相撲は、仲仕を力士の供給源の一つにしていたのである。初代の相撲頭取朝日山四郎右衛門は、仲仕出身の力士であった。また、相撲渡世集団は、仲仕労働を代替することもあった。西南戦争時、政府軍糧米の輸送をになっていた米仲仕達が低賃金に不満をもって「ストライキ」をおこした際、その代わりに軍糧米輸送を担ったのが、大阪相撲の力士達であった。明治前期には、文明開化という時代思潮のなかで、力士=野蛮とみなされ、力士不要論が唱えられたりもした。力士達がこのような行動にでたのは、そのような不要論やそれを支持する世論への抵抗・対応といった側面もあ

ったのだと考えられる。

(3) 蔵屋敷について。各藩が大坂で年貢米などを販売するために設けた蔵屋敷は、大名のお抱え力士たちにとっては稽古の場でもあり、稽古には蔵仲仕達も参加し、その中から力士が輩出されることもあった。蔵屋敷の稽古相撲を見学する町人身分のもが存在し、蔵屋敷が相撲娯楽の普及に一定の役割を果たしていたことも判明した。中津藩の蔵屋敷で生まれた福沢諭吉は、『福翁自伝』によれば、長崎遊学をやめて帰阪した際、幼い頃面倒をみてくれた武八という武家奉公人や「仲仕の内儀さん」(諭吉の乳母)に再会し、武八に屋敷周辺を案内されたという。その途次、武八は諭吉に「おりやおまえをだいて毎日毎日湊の部屋(勸進元)に相撲のけいこを見に行った」と語った。このエピソードは、蔵屋敷に住む武士、武家奉公人や仲仕の世界と相撲部屋の世界が極めて近い関係にあったことを我々に示唆している。

(4) 博徒・侠客について。前記朝日山四郎右衛門は、近世大坂において著名な侠客でもあり、彼の葬儀には大阪相撲の力士総出で野辺送りしたといわれている。また、明治期に大阪市中の消防事業を請けおう有力な侠客でもあった消防頭取たちが大阪相撲内でおきた紛争の仲裁者として立ち現れるとともに、小林佐兵衛のように相撲の興行元になるものや相撲部屋を経営するものもいた。彼らは消防頭取を辞職した明治後期においては、慈善事業に関与するようになり、その事業資金に相撲興行を利用した。

その他、以下の諸集団との関係についても明らかにした。

(5) 若者組について。若者組はそれぞれ最員の力士達をもち、場所中にはその力士名を記載した幟を携えて観戦した。

(6) 寺院社会について。大阪相撲は大阪天満宮や和光寺などの境内で興行を行うことがあった。明治以降の天神祭(大阪の代表的な祭り)では、侠客小林佐兵衛が力士を従えて、渡御列の最後尾を歩いていた。

(7) 遊廓について。大阪相撲の親方層である頭取のなかには、江戸時代以来の公認遊廓地新町で遊廓を経営するものが複数存在していた。

(8) 賤民身分について。相撲興行の際、大阪相撲は、穢多・非人の各集団に通札(入場券)を配布することが定例化していた。それは相撲渡世集団が勸進者として賤民身分と競合していたことを意味する。この勸進者としての性格は、近代になっても相撲渡世集団を規定し続ける。大阪相撲の場合、さまざまな慈善事業に関与しつづけた。例えば、日露戦後の貧民向け夜学校開設時には、開設資金募集のための慈善相撲を興行しているし、関東大震災時には相撲部屋は避難者の収容先

の一つとして機能した。また、穢多身分と百姓身分との間に紛争が起きた場合、相撲頭取が仲裁することがあった。

(9) 以上の大阪相撲と諸集団との関係についての論点は、江戸相撲など他の相撲渡世集団と比較する際にも有効であると考え、まず江戸相撲と大阪相撲との比較を部分的に行った。①賤民身分との関係については、両者に差異が認められるものの、②「相撲の家元」吉田司家との関係や③明治維新期の動揺(力士集団の脱走)などの点では共通する側面があるということが判明した。また、④市場社会との関係、⑤蔵屋敷・藩邸との関係、⑥新地開発と相撲興行との関係などの論点でも両者を比較する必要性も認識した。今後は比較研究も課題の一つと考え、検討していきたいと考えている。

(10) 大阪相撲渡世集団についての以上の分析を通じて、相撲渡世集団の性格について、以下のように認識するようであった。近世史家吉田伸之氏は、近世的な所有のありかたから疎外された存在を「近世的異端」と名付け、それらは①日用層、②乞食=勸進層、③芸能者から構成されるとし、相撲渡世集団を含む③芸能者は、②乞食=勸進層からの分化・派生形態であると位置づけた。大阪相撲に即していえば、相撲渡世集団というのは、社会における実態・存在形態の面では①日用層と近似的であるとともに、その源流である②乞食=勸進層の本質、すなわち勸進者としての性格を近代になっても保持しつづけた存在であるとまとめることができよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

(1) 飯田直樹、「書評 佐賀朝著『近代大阪の都市社会構造』、『部落問題研究』、査読無、187号、2009年、34~56頁

(2) 飯田直樹、「大阪相撲についての都市社会史的研究序説—『大坂相撲由来書』(大阪府立中之島図書館所蔵)の紹介—、『大阪歴史博物館共同研究成果報告書』、査読無、2号、2008年、69~77頁

〔学会発表〕(計2件)

(1) 飯田直樹、「大阪相撲と江戸相撲」、江戸東京博物館・大阪歴史博物館共同研究会「比較都市研究 江戸と大坂」、2009年3月6日、江戸東京博物館

(2) 飯田直樹、「都市民衆騒擾期の地域支配と警察」、大阪市立大学日本史学会大会、2008年5月24日、大阪市立大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

飯田 直樹 (IIDA NAOKI)

財団法人大阪市文化財協会・大阪歴史博物館・学芸員

研究者番号：10332404

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：